The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	1990年、バヤンホンゴル県における広域調査のフィールド・ノート
Author(s)	今岡, 良子
Citation	大阪外国語大学論集. 2002, 26, p. 41-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79875
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第26号（2002年）

1990年、バヤンホンゴル県における広域調査のフィールド・ノート

今　岡　良　子

Field work report of the first expedition of "Project Gobi" in Bayankhongor pref. in M. P. R. in 1990

IMAOKA Ryoko

1990年の日本モンゴル共同第一次ゴビ遊牧地域研究開発調査[1]（ゴビ・プロジェクト）の目的は、第二次調査以降の定点調査地域を絞りこむため、地域の現状を聞き取ることであった。調査は二期に分けられ、前半の広域調査（７月２日～31日）では、道中のボルガン県とウブルハンガイ県で２つのネグデル、バヤンホンゴル県では11のネグデルを調査し、後半の定点調査（８月11日～30日）では、バヤンホンゴル県内２つのネグデルと、ウムヌゴビ県内２つのネグデルを調査した。この調査の報告の一部は、「ゴビ・プロジェクト1990」[2]にまとめたが、これは「調査」プロセスを簡単に報告したにすぎない。

今回２つのことがきっかけになり、新たに1990年の調査報告をまとめようと思った。１つは、ネグデル解体後、10年経た現在、３年続きのゾド（家畜の大量死）が起こり、自然のマイナス条件を克服するために、ネグデルに代わる中間組織の設立が焦眉の問題となっている。

そういう問題意識をもって、1990年当時のフィールド・ノートを読み返すと、現在、もう見られなくなったソーリ、フェールムやスーニー・タサクなどのネグデル体制下の遊牧民の労働組織や暮らし、独立採算を求められたネグデルや研究所の経営努力などが書き取られている。今後の農牧業の研究のためにも、ネグデル時代の労働と生活の実態を断片でも資料にして残す必要を感じた。

1990年の夏の調査は、春に民主化運動が勝利し、夏に複数の政党が参加する選挙が初めて行われた1990年と、ショック療法による市場経済への移行が敢行された1991年のはざまに行われた。録音テープ（90分テープ、160巻）をあらためて聞き直してみると、当時の牧民や地域の代表はネグデルが必要だと述べ、ネグデルを内側から改革するため問題点を強調している。これは1987年以降続けられてきたネグデル改革の成果を感じる人々の声である。この証言を文字にしておくことは、支援国の援助を背景とするポスト・ネグデルの研究にとっても重要な資料になると思われる。

もう一つのきっかけは、2001年夏の調査でバヤンホンゴル県都を訪問した時、県知事チョイジルスレン氏より1990年以降の農牧業関係の詳細な資料を提供していただいたことである。この好意がなかったら、この調査報告を完成することはできなかった[3]と思う。市場経済移行

後は、モンゴル人研究者も経済的に困難な状況におかれたため、地方遊牧社会での長期に渡る定点調査が困難となった。外国人研究者でありながら、幸いにも調査の機会と詳細な資料を与えられた責任を少しずつ果たしていきたいと思う。

本論では、紙面の制約上、まず、1990年の広域調査での聞取りと観察の記録をまとめておきたいと思う。そして、「1990年、バヤンホンゴル県における定点調査のフィールド・ノート」、「1990年、バヤンホンゴル県ネグデルの生産力」をまとめた上で、論文「1990年、『民主化』の下のネグデル」を書く予定である。

（1） ボルガン県ゴルバンボラク郡再訪問（7月2～4日）

筆者は、1989年の日本・モンゴル共同遊牧地域調査に参加し、このゴルバンボラク郡に14日間滞在、定点調査を行なった。ハンガイ（森林ステップ）、ヘール・タル（ステップ）、ゴビ（砂漠性ステップ）の植生を有するバヤンホンゴル県との比較の必要性から、ハンガイとヘール・タルを有するボルガン県のネグデルを訪れ、1989年に調査した牧家を再訪し、聞取り調査をすることにした。

(1.1) ゴルバンボラク郡の概要

(1.1.1) 自然条件

ネグデル議長バドラルによると、郡面積2,400ｋ㎡、最高気温35℃、最低気温－39℃、年降水量200～250mm。郡の面積の５～６％が森林、ほとんどが平原地帯である。

(1.1.2) 社会条件

ネグデル議長によると、人口3,100人のうち牧民人口は710人。男女比は49：51。郡の中心地人口は、夏910人、冬1,200人。

郡中心地には、ホテル、党・ネグデル・郡行政本部、食堂、食料品店、日用品店、幼稚園、クラブ、サービスセンター、郵便局、産婦休養所、乳脂加工場、売店、町工場がある。

(1.1.3) ネグデルの概要

ネグデル議長によると、ネグデルの生産単位は、1987年にブリガード制からヘセック制に移行した。９つのヘセック、その下には161のソーリ、１ソーリの平均牧家数は２である。

ネグデルの総家畜数は、129,083頭。そのうち、ラクダ995頭、馬16,815頭、牛14,105頭、羊81,825頭、山羊15,343頭[4]。私有家畜数は19,751頭。農耕地は8,000ha。

ネグデルの基本フォンドは2,160万トゥグルク、総生産高1,160万トゥグルク、現金収入760万トゥグルク、純収入180万トゥグルク。

このネグデルでは、1989年から請負契約が導入されている。

(1.2) 郡長とネグデル長の分離

1989年に訪れたゴルバンボラク郡の郡中心地を再訪すると、郡長ジャンバルジャムツ、ネグデル議長バドラル、革命党郡代表ミチッドドルジの３人が、私たちを迎えてくれた。1989年までは、郡長とネグデル長の役職は同一人物が担っていたが、役職を分離したのである。首都ウランバートルですすめられた一党独裁の放棄が、地方ではこういう姿になって現れたのだ。しかし、現実には、人民革命党大学が地方行政を担う人材を養成し、そこを卒業した

エリート党員が中央から派遣されて来る。

民主化を内実化させるには、この地方エリート官僚達と対等に議論できる民衆が育つ必要があるが、それにはまだ年月がかかるであろう。そうなるまでには、革命党エリートと対等に議論できる民主勢力の人材がにわかに育成され、旧新のエリートが政争を展開することになる。遊牧民民衆を代表する人材がどのように育つのか、見守っていく必要がある。

(1.3) 選挙

1989年、郡長兼ネグデル長だったミチッドドルジは、革命党郡代表に配置転換されていた。革命党は、議席を死守するため、地元に影響力の強い旧郡・ネグデル長を候補者として立てたのである。この夏の選挙は、絶対負けられない構えである。

(1.4) 乳製品の祭り

私たちは、ミチッドドルジ党代表の案内で、乳製品の祭りに参加することになった。これは伝統的なお祭りではなく、郡行政主導のイベントである。80人ぐらい収容できる大きなゲルの中では、馬乳酒がふるまわれ、詩の朗詠大会が行なわれた。公民館では乳製品が展示され、品評会と表彰が行なわれた。注目すべき点は、この展示された乳製品には、作り手の名前と産地名がつけられていたことである。

ネグデルに出荷する乳製品は、それぞれの牧家やスーニー・タサックで作られるが、他で作られた乳製品といっしょに集荷される。したがって、作り方や味よりも、量が重視される。出荷用の馬乳酒の場合、ネグデル出荷用はゲルの外、太陽の下、ドラム缶で大量に作られている。

一方、自宅で食べる乳製品は質が大事であるため、丹念に作られ、大事に保存されている。

自家用の馬乳酒の場合、ゲルの中で、牛の皮袋にいれ、数千回撹拌して醸造する。この郡には、瓶に入れて、地中に埋めて冷蔵する牧家もある。

この祭りの企画者であるミチッドドルジは、供出用の乳製品の質を高める必要がある、と考えていた。それには、まず、「それぞれの牧家が作る自家用乳製品の技術の高さを評価する場が必要である。そして、私たちのネグデルの乳製品はすばらしいんだという誇りを共有して、ネグデルに供出する乳製品を作る意欲に変えていく。そのきっかけとしてこのような祭りが有効ではないかと考えた」という。

個と共同の問題をどう解決するかという重要な問題に対し、党中央ではなく、元郡・ネグデル議長が、地域の現場で考え、模索している。この乳製品の祭りは、地方分権の始まりの一端であり、地方における民主化の影響の１つと言えるだろう。

(1.5) エルデネピル、ガンチメグの牧家訪問

ゴルバンボラク郡では２戸の牧家を訪問した。７月２日、第６ヘセックの夏営地ハルガイン・デンジでは、まず、エルデネピル、ガンチメグの牧家を訪ねた。以下、２人からの聞き取りのまとめである。

(1.5.1) エルデネピル、ガンチメグの家族と労働

夫エルデネピル（28才）は、昨年までヘセック長、また人工授精の仕事やネグデルの畜群を分ける仕事をする獣医である。妻ガンチメグ（26才）はサーリチンと言って、夏期間のみ、

20頭の牝牛の搾乳と放牧を担当する[5]。二人の間には１才の子どもがいる。

(1.5.2) エルデネピル、ガンチメグ家の共同体

この夏営地には５家族（約20人）の親類が集まっている。90才の最年長者のいるゲルは、ガンチメグの親類。一年中、一緒に移動し、一緒に幕営している。５家族の家畜はあわせて2000頭に達している。

(1.5.3) エルデネピル、ガンチメグ家の契約生産

エルデネピルはヘセック長をやめたことをきっかけに、契約生産を始め、牧畜経営を強化し、収入を増やすつもりである。８月にネグデルから800頭の一才未満の雌羊を受取り、越冬させ、春にネグデルに返す仕事を請負っている。

(1.5.4) エルデネピル、ガンチメグ家の私有家畜

私有家畜は、馬33頭、牛25頭、羊と山羊が22頭、あわせて80頭。1989年の私有家畜は、馬30頭、牛12頭であったが、馬や牛などの大家畜を増やすつもりである。

ハンガイ地域の私有家畜の上限は、１戸あたり50頭だったが、今は上限が撤廃され、元ヘセック長のこの家族も積極的に私有家畜を増やそうとしている。

(1.5.5) エルデネピル、ガンチメグ家の四季の営地と飼料の給与

春営地アラシャーントには３月から６月まで幕営し、羊・山羊と牛を分娩させた。５月から牛の搾乳を始めた。夏営地ハルガイニー・デンジには９月まで幕営し、６月から羊・山羊の搾乳を始めた。７月中旬から毛刈りをする。９月になったら、ここから15キロ離れたところにある秋営地ツァガーン・ドブに移動し、10月の中頃まで幕営する。この期間は、仔畜の毛を刈り、乾草の準備をする。越冬のためには乾草飼料が８トン必要で、その半分はネグデルから買い、残り半分は自分で刈って準備する。冬営地は秋営地から20キロ離れたところにある。気温は－27℃～－30℃。枯れた草が残り、雪はあまり積もらない。乾草飼料は、体重を40％以上失った体力の弱った家畜にのみ与え、健康な家畜はできるだけ放牧して飼養するつもりである。

(1.6) ダムディンとガンドルゴルの牧家訪問

７月２日、第６ヘセックに牧民ダムディンが訪ねてきてくれた。彼は、伝統的な共同体を復活させ、兄弟や友人とともに文化施設や専門技術を共有する大ソーリか、小さな会社組織を作りたいと考え、1989年にUターンし、５年間の請負契約をネグデルと結んだ人物であった。

(1.6.1) ダムディン、ガンドルゴルの家族と共同体

夫ダムディン（32才）は、旧第５ブリガード（現第６ヘセック）で生まれ、ウランバートルに住み、カメラマンとして映画公社で働いていた。1989年にボルガン郡で契約生産が始まるということを聞き、故郷に戻り、牧民となった。妻ガンドルゴルは29才。子どもは４人、長女14才、次女11才、長男７才、三女４才。

ダムディンは弟２人の家族と共同体を組んでいる。２人の弟の家族は、それぞれネグデルの羊700頭を飼っている。兄弟３家族が一つの共同体を形成し、ネグデルと請負契約を結んでいる。

(1.6.3) ダムディン、ガンドルゴルの経営

ネグデル所有の家畜は、羊が450頭、山羊が50頭、牛が30頭、ラクダ５頭。３家族で５畜を請負い、放牧労働なども分担している。

(1.6.4) ダムディン、ガンドルゴルの私有家畜

1989年に、私有家畜の馬は６頭であったが、1990年に30頭、牛は14頭が40頭に増やした。

(1.6.5) 請負契約生産の１年目について

ダムディンは、小さな会社組織の設立を夢見ていた。「すでに契約生産を結んでいる牧家は30戸。この仲間が核になるだろう。しかし、現状は、小規模の機械を買うには資本不足であり、また遊牧の移動生活に適した機械設備がない。機械設備を共有し、協同を高めていくという方向は模索しにくい。私有家畜の増加は緩慢であるため、私有家畜を基盤にした個人経営への移行は、かなり先になるだろう。」という。

（２）ウブルハンガイ県ブルド郡再訪問（７月５～６日）

バヤンホンゴル県にむかう途中、ハンガイ山脈の東端のブルド郡を再訪した。ここは1982年から1983年にかけて小貫雅男氏が調査を行ったネグデルである。ネグデル議長アヨルザナーがウランバートルから来た監査員の対応に追われていたので、私たちはブルド郡の概要を聞くことができず、直接牧家を訪ねることにした。

ブルドの概要については、『遊牧社会の現代』[6]を参照のこと。

(2.1) アラルディンドルジ、ボリヨーの牧家訪問

７月６日、私たちは第３ブリガードに夏営する牧家３戸、まず、アラルディンドルジ、ボリヨーの家を訪ねた。

(2.1.1) アラルディンドルジ、ボリヨーの家族

夫アラルディンドルジ（54才）、ボリヨー（54才）には子供が６人。長男（27才）は、1989年までアヨーシといっしょに幕営していた。長女（26才）は、現在、親の隣に牧家を構えて夏営し、ネグデルの羊を飼っている。次女（24才）は、実家からスーニー・タサック（乳加工場）で働いている。次男（19才）は、現在ドルノド県で国境警備の兵役の任務についている。三女（18才）は、10年制学校を卒業し、現在は同居して親を助けている。プレブドルジやナツァックドルジ、トゥデブの小説など、読書が好きだという。三男（13才）は、４年生、同居。６人の子供達は独立して牧家を経営したり、他の仕事についたり、高等教育を受けたり、それぞれに選んだ進路に進んでいる。

(2.1.2) アラルディンドルジ、ボリヨーの経営

1989年までは母牛100頭を飼い、夏の間は５人のサーリチンに預けていた。三女が学校を卒業し、実家に戻ってきたことをきっかけに、母羊経営に切り替えた。母羊は、分娩、搾乳、乳加工、毛刈りなど、請負契約する業務内容が増加するので、手間はかかるが、その分収入も増える。だから、働き甲斐がある。1990年から母羊300頭担当する。今は羊を待っているところである。

(2.1.3) アラルディンドルジ、ボリヨーの私有家畜

私有家畜は、馬が23頭、牛が21等、羊が123頭、山羊が35頭、あわせて202頭所有している。

(2.1.4) アラルディンドルジ、ボリヨーの家に届く新聞

この家には「ウネン」(真実)、「フドゥルムル」(労働)、「オラーン・オド」(赤い星)、「ザローチョード」(若者たち)などの新聞が週に一度届き、読まれている。

(2.2) 7月6日、トゥムルオチル、エンフトヤーの牧家訪問

次に私たちは、隣で夏営しているアラルディンドルジの長女、トゥムルオチル、エンフトヤーの牧家を訪問した。

(2.2.1) トゥムルオチル、エンフトヤーの経営

夫トゥムルオチル(28才)、妻エンフトヤーは、ネグデルの母羊140頭、去勢雄山羊と2歳メス未経産山羊100頭を担当している。今年の春は103頭の仔羊をとりあげた。

(2.2.2) トゥムルオチル、エンフトヤーの経営私有家畜

私有家畜は、馬15頭、牛5頭、羊・山羊40頭、あわせて60頭をもっている。

(2.2.3) 選挙をどう受け止めているか。

質問:「この夏の選挙では人民革命党を支持しますか?」

トゥムルオチル:「人民革命党にはいいと思う政策もあるので支持している。しかし、いろんな考え方があってよいから民主党もいいのではないか、と考えている。」

(2.2.4) 家畜の私有化について

質問:「私有家畜の増加の原因は何ですか?」

トゥムルオチル:「ネグデル改革が始まって、契約生産が導入され、私有家畜の上限が撤廃されたことがきっかけです。経済的な刺激があり、やりがいがあります。それと、この2年間は気候が安定し、何事もなく冬を越冬することができました。賃貸契約を結んだ牧家は第1ブリガードにありますが、ここ第3ブリガードにはいません。ここでは請負契約だけが行なわれています。」

(2.2.5) 100%私有家畜にもとづく経営について

質問:「ネグデルの家畜をなくして、100%私有家畜にしたら、経営はどうなるでしょうか?」トゥムルオチル:「私有家畜100%にしても大丈夫でしょう。ただ、ネグデルがなくなれば困ります。その代わりになるものが必要です。畜産物を売る市場が近くにないと困ります。また、運搬や流通をどうするか、という問題があります。家畜を飼いながら、そこまで手がまわるかどうか。それと、木が身のまわりにないので、ハシャー(家畜囲い)は、個人の力で建てることができません。

また、ゾドの時にはネグデルなしにはやっていけません。」

質問:「トゥムルオチルさんは、将来、私有家畜を主体に経営していきますか?」

トゥムルオチル:「今のところは、私有家畜をゆっくり増やしていきますが、ネグデル家畜をゼロにするかどうか、わからない。ネグデルでないとできないことがありますから。きっと、ネグデルの家畜だけを飼う牧民、私有家畜だけを飼う牧民、それからネグデルと私有家畜を適当な割合で飼う牧民、それぞれの家の事情にあわせて、いろいろな経営がでてくると

思います。」

(2.2.6) トゥムルオチル、エンフトヤー家の買い物について

郡の中心地へは夫トゥムルオチルが行き、買い物をする。アーゲント（移動販売）は月に一度ゲルまで来る。アーゲントから買うものは、小麦粉、米、茶、塩、布、アメなどである。

(2.3) アヨーシの牧家再訪問

7月6日、アヨーシ家は、1982年～1983年にかけて、小貫雅男氏がフィールドワークを行なった時に四季を通じて訪ねた牧家である。

(2.3.1) アヨーシ家の家族

アヨーシは年金生活に入り、一人娘のウールツァイフが牧民になり、家を支えている。

(2.3.2) アヨーシ家の私有家畜

私有家畜は、馬が30頭、牛50頭、羊が300頭、あわせて380頭である。

(2.3.3) 電化の問題

アヨーシは、「羊毛をどれだけ売れば、太陽エネルギーの発電機が買えるのか？」と聞いた。

1990年1月以来、コメコン改革が進み、石油代金はドル建て決済で行なうことになり、ウランバートルでは停電が、地方ではガソリン不足が問題になっていた。発電機は、年収の半分以上にあたる高価なものである。ここに来るまでも、ガソリン不足のため動かず、雨ざらしになっているトラクターやコンバインをいくつも見かけた。アヨーシは、ウランバートルから運んでくる化石エネルギーではなく、牧民の日常空間に存在する「自然エネルギーを利用したい。」それによって、「夜も明かりのある暮らしがしたい」、という。

（3）地理学者バザルグルの話

7月6日、移動途中のバスの中で、調査隊員の地理学者のバザルグルがハシャー（家畜囲い）に関する話をしてくれた。外国の援助の問題点を指摘する興味深い話であったので、紹介することにする。

—1960年代に、ソ連の援助を背景に「すべての牧民にハシャーを」というスローガンのハシャー建設運動が展開された。しかし、これにはさまざまな問題があった。

第一に、比較的湿度の高いハンガイ地域には、サラブチタイ・ハシャー（屋根付の囲い）はいらない。屋根をつけることによって、地面に太陽が届かなくなり、囲いの中の湿度が高くなる。家畜はお腹を地面につけて眠るので、特に、妊娠している母家畜は、地面が湿っていると流産の原因となる。家畜の寝床は乾燥させておかなければならない。

第二に、牧民の意見を聞かず、ハシャーを配置してはいけない。盆地の底は寒気がたまり、山の頂上は風が強く寒い。遊牧民は、風よけの岩山のある、ちょうどいい高さを知っている。しかし、ハシャー建設は、たいてい、ネグデル議長の机の上で立案され、実行された。ウランバートルから派遣されてきたネグデル議長には、広い地元の、詳細な事情はわからない。一番寒い地点に寒さよけのハシャーを建てても意味がないが、そこを冬営地として使うようにとネグデルから指定されると、牧民は使わざるをえない。遊牧民にとっても、家畜にとっても、ハシャーは不自由なものになったのだ。

第三に、郡内に４つの営地を含まないような行政区画はだめだ。清朝時代の地図を見れば、違いが一目瞭然である。当時の南北に長い行政区画の中には、ハンガイ、ヘール・タル、ゴビが含まれている。行政の中心封建領主も、遊牧民も、ハンガイからゴビまで、南北の移動をして暮らしていた。現在は、郡内に冬営地適地がなく、他の郡に冬営地を建てざるをえないネグデルがある。夏営地適地のない郡もある。これは、人間にとっても不都合で、例えば、子供達はＡ郡の中心地にいて、親は冬になるとＢ郡の冬営地で半年間暮らす、ということになる。ホジルト郡では、1700メートル以下の標高に建てられたハシャーを使って冬営していた牧家で、生まれて間もない仔畜だけでなく、赤ん坊までも、寒さのために死ぬ事件が起こった。

これらの問題は、牧民の伝統的な知恵と経験を、時間をかけて、丹念に聞取らなかったことが根本的な間違いであったと思う。ネグデル議長は上から与えられたハシャー建設の課題をどのネグデルよりも早く達成するという使命感をもち、机の上で計画し、実行した。これはもう繰り返してはならない。遊牧民の伝統的な土地利用と半年の酷寒を過ごす冬営地の位置の関係について、長期にわたる現地調査をすることが、まず、先決である。

（４）バヤンホンゴル県訪問（７月７日～７月29日）

バヤンホンゴル県は30数年ぶりの大雨で、昨年旱魃のため干上がっていたトゥイン川が氾濫、私たちは幾度も水害にあい、その度予定を変更させられた。

７月11日、県のナーダムを観戦した。チンギスハーンの仮装行列が行なわれ、高齢のラマ僧達がスタジアムの来賓席で見学していた。宗教が解禁され、ラマ僧が忽然と現れ、民族色の濃いナーダムとなった。県知事トゥムルバートルによると、県の助成と住民のカンパで新しい寺院が復興した。「なぜ、公的資金を宗教復活に使うのか？」という質問に対し、「党・政府が寺院を破壊したのだから、県は助成すべきである」という答えが返ってきた。

(4.1) バヤンホンゴル県の概要

７月11日、県知事トゥムルバートルと人民革命党県代表サンドイジャブから県の概要の説明を受けたが、ナーダムの最中であったため、詳細を聞くことはできなかった。しかし、私たちの目的は、定点調査地域を選ぶことであったため、ゴビ地域の現状を直接見聞することの方が重要であった。

(4.1.1) 自然条件

バヤンホンゴル県の面積は、113,000ｋ㎡、日本では北海道と九州をあわせた面積、国の規模ではキューバの面積に匹敵する。18県のうち４番目の面積をもっている。平均標高は1,200メートル。最高地点は4,000メートル、最低は700メートルである。

県内は北部森林草原地帯、中部平原地帯、南部ゴビ地帯に分かれている。最低気温はマイナス45℃、最高温度は63℃（地面温度）になる。降水量は50～250mm。大小の湖が10以上あり、すべて塩湖である。ハンガイ山脈の南から中部地帯にむけて、20以上の川が流れている。

(4.2.2) 社会条件

人口は約80,000人、県都人口は20,000人。男性が47％、女性が53％。牧民人口は11,000人。

(4.2.3)　ネグデルの概要

総家畜数160万頭。ネグデル家畜は75％、ラクダ53,000頭、馬120,000頭、牛100,000頭、羊が48.5％をしめる。農地面積は15,000ha。穀物300ha、ジャガイモ400ha、飼料9,300ha

（5）ウルジート郡訪問（７月９日）

私たちは県都にサイトを置きながら、シャルガルジョート温泉峡を見学した。同行していた NHK の取材班はナーダムに参加する馬飼いの牧家を探し、撮影を始めた。私たちはその家族を訪ねて聞き取り調査を行った。

(5.1)　ウルジート郡の概要

ウルジート郡の行政を訪ねる機会がなかったので、2001年にバヤンホンゴル県が提供してくれた資料（以下、「県資料」と略す）を使って、まとめることにする。

(5.1.1)　自然条件

ウルジート郡は、ウブルハンガイ県に接し、県東北部、郡中心地は標高1841m、平原地帯に位置する。郡面積は392,130ha、このうち牧地面積は383,208ha、採草地50ha である。

郡内の東北部は寒冷・湿潤、中部は寒冷・乾燥、南部は冷涼・乾燥地帯に属する[7]。

(5.1.2)　社会条件

1990年の人口は3,050人、この内男性人口は1,519人、女性人口は1,531人。定住地域には1,080人、遊牧地域には1,970人。戸数は、郡全体で810戸、定住地域には270戸、遊牧地域540戸。牧民戸数は785戸、農家戸数は５戸。全労働人口1,748人の内、牧畜業人口1,623人、農業人口30人である。

(5.1.3)　ネグデルの概要

1990年の全家畜頭数は78,300頭、この内、ラクダ300頭、牛7,100頭、馬8,800頭、羊35,900頭、山羊26,300頭を飼養している。農耕地ではジャガイモ20ha、野菜２ ha を作付けている。

(5.2)　ガンボルト、ツェルマーの牧家訪問

７月９日、夏営地ビーリン・ブリガードのガンボルト、ツェルマー家を訪ねた。この牧家は、ＮＨＫの取材のために、モンゴル映画公社と地元行政に選ばれた模範的な牧家である。

(5.2.1)　ガンボルト、ツェルマーの家族

夫ガンボルト（35才）は革命党党員、妻ツェルマー（33才）は革命青年同盟員、子どもは６人、長女11才、次女10才、三女８才は郡の中心地で寄宿生活している。四女６才、五女３才、長男５ヶ月は親と同居。他に70才になる祖父サンギと60才のドルゴルスレン、その末っ子が郡の中心地で年金生活している。

(5.2.2)　ガンボルト、ツェルマー家の契約生産

1989年から２年間の賃貸契約生産を始めた。1990年の収入は、総収入が27,000トゥグルク、総支出は19,000トゥグルク、純益は8,000トゥグルク。この内半分が生活費になるが、契約生産を始めてから、収入は増えている。それは、温暖な気候が続いていることも影響している。1991年に契約を更新し、その年から５年間の契約にするつもりである。

(5.2.3) ガンボルト、ツェルマー家とシャルガルジョート温泉との関わり

ガンボルトはシャルガルジョート温泉に馬乳酒を持って行って売っている。温泉の近くにはビニールハウスがあり、トマトやキュウリなどが作られているが、泊まり客用なので、牧民には売らない。年に２回、7、８月になると温泉に行くのが楽しみだ、という。

(5.2.4) ガンボルト、ツェルマー家と生活用品について

このあたりには薪になる木がないので、郡の中心地へ行き、薪を買って来る。

ホンダモーターは１台1,500トゥグルクした。ガソリンは１リットルあたり１トゥグルク10ムング。ホンダモーターを使うと、月に40リットル必要だ。１年前に購入したテレビは1,300トゥグルクだった。「契約生産で現金収入が増えると、生活を快適にする楽しみが増える」、という。

(5.2.5) ガンボルト、ツェルマー家に届く新聞

新聞は、「ザローチョード」、県の新聞「レーニンの道」、雑誌「党生活」、１週間に１度届けられる。

（6） ボグド郡訪問 （７月13～16日）

私たちは、県都からトゥイン川に沿って南へ120キロ、ボグド郡に着いた。

(6.1) ボグド郡の概要

７月16日、ネグデル議長プルブジャブの誘いでオロク湖の近くの砂丘へ行き、炎天の下、ボグド郡の概要について説明を受けた。

(6.1.1) 自然条件

ネグデル議長によると、ボグド郡はバヤンホンゴル県の中心地から123km離れた、中部砂漠地帯に位置している。面積は、3,858ｋ㎡、そのうち牧地面積は383,163ha、採草地は60ha である。中北部は乾燥したゴビ平原地域では、平均標高800～1000m、南部のアルタイ山脈の山岳地域では、最高峰が3957mのイフ・ボグド山がそびえている[8]。県北部のハンガイ山脈を源流とするトゥイン川がアルタイ山脈にせき止められ、オロク湖[9]に注ぐ。

南部の山岳地帯は、垂直に乾燥・冷涼から寒冷・湿潤地帯に含まれる。７月の平均気温は、20～25℃、過去最高気温は38℃。１月の平均気温は－18℃、過去最低気温は、－38℃。年間平均降水量は、中北部では50～100㎜、南部山岳地帯には100～200㎜の降水がある。

1989年に訪れた時には、旱魃で干上がっていたトゥイン川も、今年の大雨で流量を増し、茶褐色だった大地に緑が広がっていた。

ネグデル議長によると、郡中央から北部の平原に住む馬専門ソーリと羊専門のソーリは郡内に夏営地適地がないため、トゥイン川に沿って北上し、ハンガイ地帯のウルジート郡で夏営している。郡南部にはアルタイ山脈の支脈で4,000メートル級のボグド山が東西に走っており、森林から砂漠までの植性が垂直分布する。この山を利用する遊牧民は年中郡内で幕営している、という。

(6.1.2) 社会条件

ネグデル議長によると、人口は2,800人、615戸。郡中心地人口は、夏に1,200人、冬に1,800

人。牧民戸数は275戸。男女比は49：51[10]である。

郡中心地には、10年制学校、病院（80床）、生活サービスセンター（職員25人）、トラクター修理センター（職員15人）、公衆浴場（10人収容）、発電所（郡中心地内）、チフルウブス研究所がある。

(6.1.3) ネグデルの概要

ネグデル議長によると、ネグデル組織は、1985年にヘセック制に移行し、ヘセックが５つ、その下にソーリが120ある。ネグデル員人口が600人、ネグデル員戸数が275戸。

請負契約の生産牧家は現在80ソーリ、賃貸契約の生産牧家は40ソーリ。

ネグデル議長によると、「総家畜数は75,000頭、ラクダ6,500頭、馬6,000頭、牛3,000頭、羊20,000頭、山羊40,000頭。この内、ネグデルの家畜は50,000頭である[11]。ネグデル総生産４百万トゥグルク、このうちネグデル純収入84万トゥグルクである。農耕地ではジャガイモ４ haのみ作付けている、という。

(6.1.4) ボグド郡の社会問題

質問：「ボグド郡の牧民の社会問題を解決するのに何が必要ですか？」

ネグデル議長:「遊牧民の生活改善には、まず電化が必要である。そして郡内40ヵ所に無線の通信基地を設置したい。畜産物を開発する場合、ラクダの乳を重要視したい。一頭あたりの搾乳量は夏に70リットル、冬に50リットル、年間120リットルと少ないが、700リットルに乳量をアップし、健康食品として加工するのが夢である。ラクダや馬の乳を長期保存できるような技術と設備を導入して、県都やウランバートル、日本にも売りたい。だから、ゴビ・プロジェクトに期待している。」

また、「これまでもソ連やウランバートルの研究者が来て研究報告書をたくさん置いていった。そんなものは役に立たない。無線設備でも置いていってもらったほうがずっとましだ」という。援助する気がないのならとっとと出ていってくれ、と言わんばかりであった。

(6.2) ツェンド、ダシドラム家訪問

７月15日、ネグデル議長の案内で、フーブル・ヘセックで３戸並んだラクダ飼いの牧家を訪ねた。

(6.2.1) ツェンド、ダシドラム家の家族とホタアイル

１戸目は父ツェンド（53才）、母ダシドラム（53才）の牧家、２戸目は長男エンフバヤル（30才）の牧家で、子どもが５人、３戸目はバルダンドルジ（29才）の牧家で、子どもが２人。この３戸が１つのソーリを組み、500頭のネグデルのラクダをいっしょに放牧し、１日30リットルの乳を搾乳している。

ツェンドとダシドラムはこの地域で生まれた。ツェンドの父母はラクダ飼いであった。当時2000頭飼っていたが、「今のようなこんなにいい暮らしはできなかった」という。ツェンドは14才でネグデル員となり、ネグデルのラクダを飼い始めた。1960年、20才の時にセレンゲ県で兵役についた。息子二人は兵役中で建築の専門を身に付けている。

(6.2.2) ツェンド、ダシドラム家の経営

父ツェンドの家は、ネグデルのラクダ135頭を飼い、このうち40頭の牝ラクダを搾乳し、19

頭の子ラクダを育てている。

(6.2.3) ツェンド、ダシドラム家の私有家畜

私有家畜は、ラクダ５頭、馬10頭、羊55、山羊35頭、あわせて110頭所有している。

(6.2.4) ツェンド、ダシドラム家の四季の営地

夏営地は、サイリン・ホダクというところで、井戸があり、その周辺は草が濃い。一ヶ月前にここに幕営したが、草が枯れかかっているので、まもなく移動する予定である。

秋営地は草の様子を見ながら、冬営地にむかう途中で幕営する。

夏営地から20キロほど離れた湖の北東部の砂漠にニャンボーという冬営地がある。そこには井戸がある。冬営地には12月から３月まで、長男や次男のゲルは少し距離を置いて幕営する。

冬営地から３キロほど離れたところにドンド・ハヤーという春営地がある。そこには３メートルほどの深さの手組み井戸がある。

(6.2.5) ホショーの行政区画について

質問：「現在のボグド郡の行政区画についてどう思いますか？」

ツェンド：「昔の行政区画ホショーは理にかなっていると思う。伝統的な遊牧民の移動範囲を含むよう領土が決められたのではないか、と思う。ホショーの中には、４つの季節、ハンガイ、ヘール・タル、ゴビがあったため、五家畜を飼うには適していた。今の行政区画は４つの営地が備わっておらず、不自由である。」

(6.2.6) ネグデルの必要性、私的経営への移行について

質問：「契約生産が導入され、私有家畜が増加していますね。将来ネグデル家畜もすべて分配し、私有家畜にもとづく経営をするとしたらどうか？」

ツェンド：「それはダメだ。第一に、モンゴルの自然条件がある。特に冬の寒さは、牧民にも、家畜にも、他の国とは比べ物にならないほど厳しい。第二に、牧民一人ではできないことがたくさんある。獣医や医師はなくてはならない。また、老後の年金も必要だ。ゾドの時には、飼料はボルガン県やセレンゲ県から運ばれ、ネグデルを通じて分配される。だから、ネグデルは絶対必要だ。」

(6.2.7) ツェンドとダシラム家の都市、郡の中心地とのかかわり

ツェンドは兵役中の息子に会うために何度かウランバートルにでかけた。そのついでに博物館やコンサートを楽しむのだ、という。「都は何でも素晴らしい。」都では若い人の暴走族ができたことも聞いた。「民主化運動がおこり、ハンガーストライキがあったと聞いたが、なぜ、そんなことをするのか、わからなかった」という。

ツェンドの夏営地から郡の中心地までの距離は、13キロ。病人が出た時は、馬やラクダに乗って医師を呼びに行く。医師は車で駆けつける。

(6.2.8) 新聞

「ウネン」、「モンゴルのいなか」、バヤンホンゴル県発行の新聞が一週間に２回届いている。

（７）シンジンスト郡訪問（７月16日～21日）

ボグド郡から西南、シンジンスト郡の中心地よりさらに南にエヒン・ゴルというオアシス

があり、砂漠植物研究所がある。私たちはこの最南端の研究所を訪ねた。

(7.1) シンジンスト郡の概要

シンジンスト郡では行政から話を聞く機会がなかったため、概要については資料からまとめることにする。

(7.1.1) 自然条件

シンジンスト郡は、県南部ゴビ草原から砂漠地帯、郡中心地は県都から265km、ウランバートルから886km離れ、標高2,312mに位置する。郡面積は、1,650,123ha、岩手県より大きい。その内、牧地面積は1,489,814ha、採草地なし。北部は冷涼・乾燥地帯、中南部は温暖・乾燥地帯にある[12]。

(7.1.2) 社会条件

「県資料」によると、1990年の人口は2,173人、この内男性人口1086人、女性人口1087人、定住地域人口1,016人、遊牧地域1,157人。全戸数476戸、定住地域173戸、遊牧地域303戸。牧民戸数226戸、農家戸数０戸。全労働人口701人、牧畜業人口335人、農業人口０人。

(7.1.3) ネグデルの概要

『農牧業資料集１』によると、全家畜頭数59,600頭、ラクダ5,600頭、牛頭400、馬1,600頭、羊13,500頭、山羊38,400頭の家畜を飼養している。農耕地では飼料作物21.7ha のみ作付けている。

(7.2) エヒン・ゴル研究所訪問（７月18～19日）

エヒン・ゴル研究所では、スレンジャブ所長から説明を受けた。

(7.2.1) 研究所長　スレンジャブ

大学卒業後、1969年よりダルハン市の植物、農耕研究所に勤めた。1980年モスクワで農業化学を専攻し、修士課程を修了する。エヒン・ゴルの研究所に来てから２年目になる。

(7.2.2) エヒン・ゴル概況についてのスレンジャブの説明

エヒン・ゴル地域の住人は研究所に勤める人々及びその家族である。62家族283人が住んでいる。35才以下の若者が全人口の83％を占める。研究所から10kmのところにある空港に県のヘリコプターが着陸し、研究所の人々が購読している新聞や雑誌が運ばれる。

(7.2.3) エヒン・ゴルの気候について

最低気温－18℃（１月）で、最高気温57℃。１月の平均気温は－11.6℃。０℃以上の日は150日以上。積算温度は2,750℃。年間降水量は46.0mm。泉は３つあり、20.7リットル/秒の水が沸きだしている。

(7.2.4) 研究所の生産物

昔、このオアシスには中国人が住み、豊かな水を利用して、阿片を作っていた。1968年に研究所が設立され、現在、年間1,300～1,700kg の種、胡瓜の種300kg、西瓜の種200kg、玉葱100kg、灰条菜、はみうり、トマト、まくわうり、ねぎなどの種を栽培し、国内の農場に販売している。長葱の種については、国内シェアの17～18％をここで作っている。また胡瓜の瓶詰やトマトジュースの生産・販売なども行なっている。

1981年よりパプリカや唐がらしなど、７種類の種を作るようになった。1989年以降、①在来の牧草、潅木性植物、潅木[13]、②民間医療用の薬草（アルタン・オタス、リデルなど）を育てる目標を立てている。

(7.2.5) 研究所の独立採算

1989年からこの研究所にも独立採算制が導入された。農地面積20ha のうち、1989年は14.3ha を耕作し、270万トゥグルクの収入、純益は26万トゥグルクあった。1990年は、290万トゥグルクを売り上げ、50万トゥグルクの純益を試算している。将来計画は、①野菜の種、②ゴビの植物の種、③薬草、④生産物を加工、缶詰にすることである。

(7.2.6) 研究所の灌漑施設

灌漑施設の建設費は70万トゥグルクかかったが、スレンジャブがここに赴任してから190万トゥグルクの収益があがったので、赤字をうめることができた。だが、現在の灌漑施設は不充分で、地下灌漑施設をつくることができれば、もっと生産性が高まる。だから、ゴビ・プロジェクトに期待している、という。

(7.2.7) 研究所で働く人

研究員は36人、このうち80％が野菜を作り、18％は事務を職務としている。家畜は私有家畜として670頭飼っている。家畜のほとんどが山羊で、牛は80頭だけいる。

野菜作りには６つの作業グループがある。①トマトのグループは11人。②西瓜・はみうりのグループは７人。③胡椒のグループは10人。④胡瓜のグループは８人。⑤果実・樹木のグループは６人。⑥生産加工グループ５人。

農作業期間は、４月15日から10月まで。その他の期間は、建設、修理、加工などの作業を行なう。

(7.2.8) 研究所で働く人の給料

1990年６月に法制化された企業法に従い、エヒン・ゴル研究所で働く人は、生活環境が厳しいという理由で、さまざまな優遇措置を受けられるようになった。まず、賃金以外に月80トゥグルクが支給される。その他、労働の強度や作業内容による賃金等級に従って賃金を決める時、ハンガイ地帯よりも１，２等級あげて支給されることになった。1989年度には月給の平均は280トゥグルク、最高年収は5,000トゥグルクであったが、今年は全体的に30％はアップする。今年の６月の賃金は、最低で375トゥグルク、最高で680トゥグルクと算定されている。

(7.2.9) 試験農場にて

試験農場には、薬草の他、ゴニトやコスモス、松葉ボタン、矢車草、胡瓜なども植えられている。以下は、試験農場で働いているアリマーの話である。

アリマーはシンジンスト郡の中心地ザラーで生まれた。８年生中学校を卒業した後、セレンゲ県にあるアルタンボラクの専門学校を卒業後、1980年にこの研究所勤務が決まった。夫は会計士、月給は320トゥグルク。アリマーの月給は550トゥグルク。子どもは７才の子が一人いる。アリマーは植物を育てる仕事が好きだという。

この研究所で生活して困ることは、医療面と生活物資の調達である。医師は一人いるが、薬は古く、質が悪い。研究所内の購買部にはシンジンスト郡の中心地から運ばれてきた商品、

パン、小麦粉、お菓子などがあるが、アメや果物、缶詰類は不足している。私有家畜の山羊22頭からミルクを搾乳して、乳製品を自給している。

(7.2.10) 研究所で働く若者

ダンバは22才。県中部のバヤンツァガーン郡出身である。月給300トゥグルク。年末に調整手当てが支給される。バヤンツァガーン郡に住む両親が、私有家畜の山羊10頭を預かっている。食料が必要な時は、トラクターに乗って、山羊を連れて帰る。

スレンは21才。月給300トゥグルク。研究所内で兄と同居している。両親が私有家畜の山羊10頭預かり、郡中心地に住んでいる。

この２人との会話の中にも「民主化」、「独立採算」という言葉が頻繁に現れ、モンゴル最南端の研究所にも新しい時代を作ろうとする意欲が満ちていた。

（8）バーツァガーン郡訪問（７月21～22日）

私たちは、シンジンスト郡から北上し、バーツァガーン郡に入った。

1989年、バーツァガーン郡に訪れた時、「ゴビにはマイナスばかりでない。独特な果実があり、レンガの原料や天然の塩もある。地域の潜在力を活かして、中国との国境貿易で、ネグデルを発展させたい」と語った若い郡・ネグデル長バヤンダライを再訪した。今年は、郡長ロンディア、ネグデル議長バヤンダライ、人民革命党郡代表オチルバットの３人が私たちを迎えてくれた。

(8.1) バーツァガーン郡の概要

まず、ネグデル議長バヤンダライが郡の概要を説明してくれた。

(8.1.1) 自然条件

バーツァガーン郡はバヤンホンゴル県北部のハンガイ山脈と県中部のアルタイ山脈にはさまれる砂漠性草原地帯に位置し、年較差が大きく、乾燥し、風が強い。郡面積は7,432k ㎡、熊本県[14]より少し大きい。牧地面積は742,388ha、採草地170ha。郡中心地標高は1,248m。

中北部は亜温暖・亜乾燥地帯、アルタイ山脈にかかる南部は冷涼・乾燥地帯に属する[15]。ハンガイ山脈から降水を集めるバイドラク川は、バーツァガーン郡中西部に位置するブーンツァガーン湖[16]に注ぐ。

(8.1.2) 社会条件

ネグデル議長によると、1990年の人口は3,400人[17]。この内、ネグデル員人口700人。ネグデル員戸数300戸。中心地人口1,000人。全労働人口1,964人、牧畜業人口1,571人、農業人口70人である[18]。

(8.1.3) ネグデルの概要

ネグデル議長によると、チョイバルサンの道」ネグデルには５つのヘセックと286のソーリがある。家畜総数158,500頭の内、ネグデル家畜は94,100頭、私有家畜数は64,400頭である。[19]井戸数600[20]、畜舎数200 、農耕地46ha[21]。

ネグデル議長によると、ネグデル員の平均月収200トゥグルク、公務員の平均賃金　350～450トゥグルク。

(8.2.1) 30年ぶりのゴビの大雨

質問：「今年は久しぶりの雨だそうですが、ここでもそうですか？」

ネグデル議長:「今年は30年振りの大雨の年となった。シャラブ、ターナ、フムールなどさまざまな草がはえている。しかし、これらは一年生の草である。多年生の牧草や潅木が根づいてくれることを望んでいる。多年生の草木は、地上では飛砂や砂丘の移動を押さえ、地下では地下水脈を引き上げてくれる。30年前、バイドラク川やブーンツァガーン湖は今よりもっと水量があった。全体として乾燥化、砂漠化していると思われる。植生も変わってきている。」

(8.2.2) 水の問題について

質問：「やはり、ゴビ地域の発展を考える時、水の問題が最重要課題でしょうか」

ネグデル議長:「ゴビに生きる人々にとって、水はダイヤモンドより価値がある。水さえあれば、ゴビで充分生活できる。例えば、湖の西北部は、地下300m 掘っても地下水脈にあたらない。だからそこでは草がよくはえていても、家畜を放牧することができない。また、井戸があっても、雨が降らなければ草は育たないから、井戸の周辺には幕営できない。ゴビでは量がわずかであっても雨が降れば、一気に草が繁茂し、家畜は太る。畜産物をたくさん生み出す。水の問題は、私たちの実生活と未来を決定する大きな問題である。」

(8.2.3) 行政区画について

質問:「水の問題はゴビの宿命のようですが、ただ、去年もおっしゃっていたように、もともと、行政区画に問題があり、バーツァガーン郡はゴビ100％の土地になったのですね。」

ネグデル議長:「そのとおりだ。行政区画に問題がある。バーツァガーン郡では雨の多い今年も、７～８万頭の家畜と７割のネグデル員がバヤンオボー郡で夏営している。ネグデル建設前、今のバヤンオボー郡、エルデネツォクト郡、バーツァガーン郡はダイチンワンという封建領主の領土（旗）であった。その領土は、伝統的な遊牧の四季の移動範囲であり、ハンガイ、ヘール・タル、ゴビを含んでいた。例えば、ハンガイ地帯に位置するバヤンオボー郡のあたりは夏営地、ゴビ地帯のバーツァガーン郡のあたりは冬営地として利用されていた。今でもバーツァガーン郡の第３、４、５ヘセックのネグデル員は、バヤンオボー郡の夏営地を利用している。1989年県に行政区画の変更を申請したが、回答はまだもらっていない。」

(8.2.4) ネグデルの借金

質問：「ネグデルの経営状況はうまくいっているのでしょうか？」

ネグデル議長：「ネグデル総生産は550～650万トゥグルク、現金収入は560万トゥグルク、純収入は90万トゥグルク。しかし、借金が40万トゥグルクある。この借金は1986年から1987年にかけておこった旱魃と雪害による支出増加にともなうもので、現在も返済できていない。」

(8.2.5) 独立採算

質問：「借金を抱えているとなると、独立採算を求められると苦しいのではないでしょうか」ネグデル議長:「そのとおりだ。借金の原因は自然条件が原因なのだ。夏営地のない自然条件は国が決めたのだ。私たちが何か失敗をして作り出した借金ではない。国はネグデルに独立採算を求めているが、ゴビ地域のネグデルは、草資源、畜舎の材料となる森林資源、また水資源に乏しいため、郡内で独立採算することは難しい。すでに借金を抱えているネグデ

ルにとっては、極めて困難である。」

(8.2.6) 経営の自主性

質問：「ネグデル経営に自主性を持たせると経営状況はよくなるのでしょうか？」

ネグデル議長:「バーツァガーン郡はゴビ草原に位置しているため、牛を飼うことに適さない。しかし、これまでは国が定めたバターの国家調達の目標[22]を達成するために、羊や山羊の乳量ではまにあわないため、牛を飼わざるをえなかった。しかし、ネグデルに経営の自主性を認められたため、牛の飼養頭数を減らしていきたいと思っている。」

(8.2.7) 流通開拓

質問:「ネグデル経営に自主性をもたせるということは、販売先も自主的に選べるのでしょうか？」

ネグデル議長:「国は独立採算を求める一方、国家調達を緩和し、ネグデル経営と流通の自主性を認めるようになった。今年からは肉の供出量のみ国が決定し、肉以外の畜産物の生産目標は各ネグデルで決め、国家調達以外の畜産物は契約を結んで自由に売れるようになった。

バーツァガーン郡では山羊のカシミヤとラクダの毛を国に15トン供出し、МОНЭЛ（略称「モネル」：モンゴル・エレクトロン）社に１トン販売した。モネル社が車を出して畜産物を受取りに来る。代金は必ずしも現金ではなく、現金よりも価値のあるテレビ、通信機器、発電機、ラジオ・カセットレコーダーなどと交換した。皮革は、皮革協同組合に販売した。

しかし、市場価格が安ければ、毛の場合、売らずに残しておくつもりだ。市場で利益が出た時、通信機械、運搬手段、発電機、文化設備などを購入するつもりである。」

(8.2.8) 市場価格

質問：「畜産物価格は変わりましたか？」

ネグデル議長:「国家調達の羊の価格、つまり、国がネグデルから買い上げる時の価格は80トゥグルク。ネグデルの価格、つまり、ネグデルが牧民の私有家畜から買い上げる時の価格は、120トゥグルク。一般人が牧民の私有家畜から買い上げる時の価格は、300から350トゥグルク。すでに公定価格と市場価格の間に４倍の価格格差ができている。これでは、国に供出するより、個人的に販売した方がいいとなるだろう。国家調達のシステムそのものが壊れる可能性がある。」

(8.2.9) 畜産物の格差

質問:「自然条件の厳しいゴビのネグデル議長として、国の政策に期待することは何ですか？」

ネグデル議長:「ゴビは自然条件が厳しいから、牧民の労働量が多い。にもかかわらず、店に出る肉は、ハンガイ地方産も、ゴビ地方産も、同じ価格で並んでいる。これでは、ゴビの遊牧民はますます貧しくなる。1970年に山羊のカシミヤやラクダの毛については、調達価格が高くなったので、ゴビの牧民の収入が増え、生活は向上した。自然条件の格差が、経済格差につながらないよう、国が価格管理を行う必要がある。」

(8.2.10) 電化の問題

第１ヘセックのニャムスライ家のゲルの屋根 には、約30×40cmの太陽光を集めるパネルが置かれていた。ゲルの天井には30cmぐらいの蛍光灯がぶらさがっていた。ネグデル長が内モ

ンゴルから６個購入し、国営商店においたところ、さっそく６戸の牧家が購入し、使い始めたという。

電化の問題もできるところから手懸けている。ラジオの普及率は100％、テレビは60戸、ホンダの発電機は70戸ほどの牧家が所有している。

(8.2.11) 定住化の問題

質問：「では、定住化の問題についてどう思われますか？」

ネグデル議長:「定住化はゴビ地方では難しいだろう。定住して家畜を飼うとなると充分な飼料を蓄える必要がある。ゴビでは草を余分に栽培することよりも、井戸を掘り、牧地を広げて、自然の草の利用地域を拡大する方が適している。あるいは、家畜を移動させながら、牧草が不足する季節に飼料を与えることは可能であろう。定住するよりも、むしろ、移動に適応した生活・労働用具を生み出し、移動生活を快適にすることがいいのではないかと思う。」

(8.3) 郡長ロンディアの考える牧民の社会問題

ロンディアは郡長になって２ヶ月目。それまではバヤンツァガーン郡で党の仕事についていた。新しい郡長に牧民の社会問題について聞いてみた。

「まず、第1にするべきことは、厳しい自然条件下に生きる人間の労働と生活、そして自然そのものを保護すること。第２に、健やかに暮らせるようにしたい。水と内臓の病気のかかわりについて調べたい。第３に、通信システムを設置して、離れて住んでいる人が精神的に安心して暮らせるようにしたい。第４に、移動生活していても、テレビやラジオを通じて情報をえて、文化を楽しめ、快適な生活ができるようにしたい。これらの点でゴビ・プロジェクトと共同したいと思う。」

若いネグデル議長の地域づくりが非常に興味深いことと、またハンガイのネグデルとの関連を広域に押さえられることから、この郡を定点調査地域として選ぶことにした。

(8.4) ドルジパラムとツェンドアヨーシの牧家訪問

７月22日、ネグデル議長バヤンダライの案内で、第１ヘセックで夏営しているドルジパラムとツェンドアヨーシ家を訪ねた。

(8.4.1) ドルジパラムとツェンドアヨーシの家族

ドルジパラム（49才）とツェンドアヨーシ（42才）、子どもは11人。長女25才は結婚し、長男23才は兵役中である。次女21才と三女19才は牧民になり、実家を助けている。次男17才、三男15才、四男13才、五男11才、六男９才は郡の中心地の学生寮に入っている。四女、五女は実家にいる。

(8.4.2) ドルジパラムとツェンドアヨーシの経営

ネグデル家畜については、ラクダ４頭、ネグデルの１才羊421頭、山羊160頭、母山羊77頭、仔山羊90頭。ラクダは移動用に使っている。搾乳期間中に山羊１頭から搾乳期間中18リットルの乳を国家調達に供出するノルマがある。１キロのアーロール、あるいはビャスラグを作るには10キロの生乳が必要である。

(8.4.3) ドルジパラムとツェンドアヨーシの私有家畜

私有家畜は、馬12頭、母馬３頭、仔馬２頭、牛は８頭、母牛３頭、仔牛３頭、羊20頭、母羊20頭、仔羊20頭、山羊40頭、母山羊30頭、仔山羊20頭。これからは馬を増やしたい、という。

(8.4.4) ドルジパラムとツェンドアヨーシの４つの営地

６月中旬に夏営地オランエレックに幕営した。ここには井戸はなく、バイドラク川から水を利用する。1989年は旱魃だったので、北部ハンガイ地域のガロート郡で夏営した。夏営地幕営中には、山羊の搾乳（１日１頭から200ｇ）を行なう。８月には山羊、羊の親子を分ける。

９月から10キロ離れた秋営地ハヤン・ホダックへトラックで移動する。９月になると山羊の搾乳量は１日100ｇに減るが濃くなる。

11月から秋営地から60キロ離れた冬営地オラン・トルゴイに移動する。ここには手組み井戸あるが、畜舎はない。年内は越冬準備のため、ラクダ１頭、馬１頭、羊３頭、山羊３頭をと殺する。山羊や羊は一年間に13頭食べる。

２月下旬には、冬営地から50キロ離れた春営地シン・ホダックへ移動する時、途中２泊する。ここには、手回し棒付井戸と石の家畜囲いがある。

姉の牧家と夏はいっしょに幕営ことが多いが、冬と春は別々に暮らす。家畜が多いことと移動距離が長いため、他の家族と移動したり、幕営したりすることに興味がない、という。

(8.4.5) ドルジパラムとツェンドアヨーシの家の収支

ドルジパラム家の年間収入は6,000トゥグルクになる。１ヶ月にすると500トゥグルクとなり、郡平均のネグデル員の平均月収200トゥグルク、公務員の平均賃金　350～450トゥグルクと比べると高い収入を得ている。しかし、家族が多いため、食費（小麦粉・砂糖）や生活必需品の支出は、月に400トゥグルクになる。

(8.4.6) ドルジパラムとツェンドアヨーシの家に届く新聞

新聞「ウネン」紙、「モンゴルの女性たち」紙、「バヤンホンゴル県の新聞」が届いている。

(8.4.7) ドルジパラムにとってゴビに生活することは？

1990年は雨が多く、ターナやバグロール（アカザ科）も増える。いい年もあれば、悪い年もある。ひでりの時は大変だけれど、たいしたことないよ、という。

(8.5) オチルバットとポローチの牧家訪問

７月23日、ネグデル議長の案内で、第１ヘセックに夏営している県の優秀牧民オチルバット、ポローチ家を訪ねた。

(8.5.1) オチルバットとポローチの家族

夫オチルバット（39才）とポローチ（37才）には子ども５人。長女13才牧民になる。長男11才は、家畜好きだが、学校嫌い。次女７才、次男６才、三男３才。

オチルバットは16才でネグデル員になった。24才でポローチと結婚し，両親がラクダ飼いだったので、自分もラクダ飼いになった。1990年県の最優秀牧民[23]に選ばれ、メダルと1,000トゥグルクの賞金をもらった。２年続けていい成績を残せば、国の最優秀牧民に選ばれる。賞品は５ハナのゲルと6,000トゥグルク。

(8.5.2) オチルバットとポローチの経営

ネグデルの家畜は、ラクダ164頭、母ラクダ52頭、仔ラクダ25頭、馬10頭、母山羊29頭、仔山羊29頭の家畜を１ソーリ・１アイルで飼っている。1990年１月からどれも賃貸契約を結んでいる。利益がある。1989年の収入は月500トゥグルクだったが、今年の年収は17,000トゥグルクになり、増加しそうだ。

(8.5.3) オチルバットとポローチの家の私有家畜

私有家畜は88頭。ラクダ３頭（母ラクダ１頭）、馬18頭（母馬５頭、子馬２頭、種馬１頭）、牛はいない、羊21頭（母羊８頭、仔羊11頭）、山羊51頭（母山羊29頭、仔山羊24頭）

(8.5.4) 営地

４つの営地は全て第１ヘセックの中にある。

湖の南、春営地ハルザン・ドブ（冬営地から29キロの地点）には、井戸、サラブチタイ・ハシャーがある。ラクダは３月15日頃、山羊は３月20日頃から生まれる。

夏営地マンハン、６月から10月まで山羊と羊の搾乳をする。近くに４つのアイル、1つは姉のアイル。

秋営地シャンリン・アム（夏営地から７キロの地点）では、10月からラクダの搾乳を始める。

冬営地エンデルト（夏営地から33キロの地点）には、石のホローと３メートルの深さの井戸がある。11月にネグデルがスフバートル県から種山羊、ゴビアルタイ県から種羊（細毛種300～400トゥグルク）を連れてきて種付けをする。12月にウムヌゴビ県から種ラクダ（4,000トゥグルク）を連れてきて、種付けをする。ラクダは運びやすい凍結精子を希望している。

(8.5.5) 冬の準備

冬を越すために、1989年は、ラクダ１頭、山羊３頭、羊３頭、馬１頭をとさつした。ラクダは干し肉にし、山羊、羊、馬は冷凍保存する。４月20日頃までに食べると味は変わらない。内臓も冷凍保存して、少しずつ食べる。

（9） ボーツァガーン郡訪問（７月23日～24日）

７月23日、ボーツァガーン郡の郡長がバーツァガーン郡滞在中に訪ねてきたので、ボーツァガーン郡を訪問することになった。この第一次調査は、ゴビ地域に定点調査地点を確定するために行ったため、ボーツァガーン郡から北のハンガイのネグデルは、ゴビ地方との比較という位置づけで訪問することになった。そのため、滞在期間が短く、郡の代表から概要を聞き、地域内を視察することが中心となり、牧民からの聞き取りを行う時間がなかった。

(9.1) 郡の概要

郡長ツェデンドルジから説明を受けた。

(9.1.1) 自然条件

ボーツァガーン郡はバヤンホンゴルの西部、県都から170キロ。半分が平原地帯、半分がゴビ地帯に属する。郡中心地の標高は、2,004m。森林はほとんどない。ゴビアルタイ山脈の谷筋に位置するため風が強い。バイドラク川が流れ、小さな湖がある。ここ数年旱魃が続き、約30の泉が枯れた。今年は雨が多い。郡面積は、536,313ha、牧地面積は489,216ha、採草地

429ha。北部は亜湿潤・寒冷地帯、亜乾燥・亜寒冷地帯に含まれる[24]。

(9.1.2) 社会条件

ネグデル議長によると、人口4,000人[25]、710戸。中心地人口1,700人。牧民人口310人。[26]

郡の中心地には、学校や病院などのほかに、皮革、フェルトや毛皮、パンや菓子、食品などの公営の加工工房がある。個人経営のゴアンズ（食堂）もある。ネグデル議長は、タルバガンや馬の肉を加工する工房をもちたいと考えている。

(9.1.3) ネグデルの概要

郡長によると、ネグデルは５つのブリガードに分け、その下にソーリが310ある。将来拡大ソーリを組織するつもりである。

総家畜数は14万4000頭、ネグデル家畜は12万頭、私有家畜は24,000頭。ネグデルの総生産高は700万トゥグルク、現金収入600万トゥグルク、純収入150万トゥグルク。[27]

農耕地ではジャガイモ９ ha、飼料作物107ha 作付けている。

(9.2.1) カシミヤの調達と新しい販売先

ボーツァガーン郡の山羊の数は63,000頭、国内で２番目に山羊が多い郡である。カシミヤは年間20トンをゴビ・コンビナートへ供出していたが、1990年は買い付け価格を考えて販売先を選び、17トンをモネル社、1,5トンをデブシルと工場などに売った。

ネグデルが牧民からカシミヤを買い付ける価格は、36トゥグルク、国に売る価格は72トゥグルクキロ。モネル社やデブシル工場は130トゥグルク、国の買い上げ価格の２倍近くの価格で買い付けてくれた。

(9.2.2) 定住化の実験

ネグデルは自然の草を年間1,600トンを刈って（ハドラン）、混合飼料を作る飼料加工場をもっている。このような設備を基盤にして、定住型、施設利用型牧畜の実験が行なわれたが、舎飼いにより家畜が運動不足になり、体力が弱り、病気になり、ストレスが溜まり、実験は失敗した。

(9.2.3) 牧民の社会問題

この郡は水、エネルギー、燃料が不足するという問題を抱えている。砂の移動が激しいため、多年性の草を育て、移動を止める必要がある。牧民にとっては、移動しながらも文化的な生活ができるよう、遊牧形態に適したテレビや冷蔵庫、ラジオが必要である。

(10) ゴルバンボラク郡訪問（７月24～25日）

私たちはさらに北上し、ゴルバンボラク郡を訪ねた。ここは県の中心地から244キロメートル離れた西北部、ザブハン県に接している。

(10.1) ゴルバンボラク郡の概要

郡長グルセッド（今年党大学を卒業）、労働組合委員長サンディブ、自然保護局長グルジャブ、モンゴル人民革命同盟員マームの３人から郡の説明を受けた。

(10.1.1) 自然条件

ゴルバンボラク郡はハンガイ山脈南側の山岳地帯の森林草原に位置する。郡面積は、444,181ha、牧地面積は417,682ha、採草地6,330ha。平均標高2,300m、郡中心地標高2507mに位置する。郡内の主要河川シャル・オス川はザブハン川の源流の１つである。

県内では、寒冷・湿潤地域に含まれる。７月の平均最高気温は13℃、過去最高気温は20℃、１月の平均最低気温は－20℃、過去最低気温は－52℃である。積算温度は723℃。牧草は５月10日頃発芽し、９月15日には青みを失っている。植物の生育期間は年間80日。年間平均降水量は270㎜であるが、郡内約80％地域で300㎜の降水量がある。また、シャル・オス川の源流地帯では、400㎜以上の降水量がある。降雪量は10cm 以上。フフ湖は清く澄んだ美しい湖であり、魚も生息する。

気候は冷涼で、滞在中も、夏というのに大きな雹が降った。ネグデル長によると、ゴルバンボラク郡の土地は凍土が多く、耕作ができない、寒さで建築物の壁が割れるため、固定家屋を長期間維持することができない、水が凍らないよう井戸を暖めるため、経費がかかる、という。

(10.1.2) 社会条件

ネグデル議長によると、人口2,050人。郡中心地人口は1,050人、戸数270戸。牧民人口760人、牧民戸数360戸。[28]

(10.1.3) ネグデルの概要

ネグデル議長ニャムダワーによると、ネグデル組織は、ヘセックが４、その下にソーリが360。家畜総数 78,256頭。総生産高420万トゥグルク、現金収入390万トゥグルク、純利益75,3万トゥグルク。

総家畜数はラクダ150頭、馬8,300、ヤク14,000、羊41,000、山羊14,800頭[29]。この内、ヤクが主要家畜であるが、羊も冷涼な気候に適応するので多く飼っている。その他、狼、きつね、山猫などの野生動物も多く生息する。野生動物の中でも、タルバガンが非常に多く、年間３万頭を捕獲し、タルバガンの皮革を調達していることで有名である。近年、タルバガンの数は減少傾向にある。農耕地ではジャガイモ１ ha のみ作付けている。

(10.2.1) オトルを受け入れるネグデル

このネグデルには、郡内の家畜だけではなく、ザブハン県オットゴン郡、県内のザク郡やバヤンボラク郡から夏のオトルに来る。オットゴン郡だけで89,000頭の家畜がやって来る。オトルを受け入れるネグデルにとって、独立採算とは何なのか？根本的な問題となっている。

(10.2.2) 契約生産の状況

ネグデル議長によると、今のところ１ソーリは１アイル。拡大ソーリは生まれていない。ヘセック単位で５年間の賃貸契約が始まったばかりである。粗収入の10％はネグデルに支払い、30％はヘセックがゾドなどの自然災害に備える共同ファンドとして蓄え、残りは各牧家の収入としている。

また、20頭の牛から20頭の仔牛が生まれた場合、２～３頭は私有家畜とすることができるなど、個（牧家）と共同（ヘセックとネグデル）の利益をうまく組み合わせながら、試行錯

誤するつもりである、という。

(10.2.3) トーバル（家畜の出荷）

ネグデル議長によると、近くに市場が欲しい。国家調達の家畜のトーバルは、５月10日にここを出発し、８月10日にウランバートルのコンビナートに到着するよう、３ヶ月間肥育しながら移動させる。しかし、冷涼な地域から温暖な地域に外的環境が変わったり、蚊の襲撃に遭ったりして、家畜は体力を消耗し、ストレスを生む。必ずしも道中で太るとは限らない。ここからウランバートルまで追っていくより、ザブハン県に出し、ネグデルが直接販売できるようにしたい、という。

また、昨年生まれた子供の数が60人、その内20人が死亡した。郡の中心地には、医師が１人、準医師が２人いて、ヘセックには４人いるが、不足している。

ハンガイという風土は、水が豊富で、緑が多く、家畜もよく太る豊かな森林草原地域を意味する。ハンガイといえども、寒すぎる地域は植物も、動物も、人間も暮らしにくく、必ずしも豊かではないことが、以下のネグデル長の言葉からわかる。

「胃腸の病気が多く、医療設備の充実を図りたい、ヤクの乳を充分利用できず捨てているため、小工場を建設したい、技術者の養成したい、風力と太陽エネルギーの発電機や無線、テレビをネグデル員の家庭に設置したい、モーター式の井戸を増設したい。この希望をかなえるため、ゴビ・プロジェクトに協力してほしい」、という。

(11) ジャルガラント郡訪問（７月26～28日）

私たちは、ゴルバンボラク郡から東、ジャルガラント郡の国営農場を訪れた。

(11.1) ジャルガラント郡の概要

郡長オンドマー35才と労働組合長ダランタイから国営農場の説明を受けた。

(11.1.1) 自然条件

ジャルガラント郡は、県の中心から175km離れた、郡北部ハンガイ山脈の南側の山岳地帯と南部のジャルガラント川の源流河谷地帯を含んでいる。郡面積は、417,453ha、牧地面積は410,432ha、採草地6235ha。平均標高は1,800～2,000m、郡中心地の標高2,396m。

ジャルガラント川はバヤンホンゴル県の２大河川の１つであり、また県内２大湖沼の１つブーンツァガーン湖に注ぐ。全長300km。川幅40～60m。

北部は寒冷湿潤、南部は冷涼亜乾燥である。北部の冬季平均気温は－30～－35℃、最低気温は－47～－50℃に達することも稀ではない。夏季の気温は20～27℃と涼しい。降水量は北部で400mm以上、南部で300mm以上である。

(11.1.2) 社会条件

郡長によると、1990年の人口3,800人、750戸。牧家戸数は360戸。1,550人。国営農場の中心地人口2,600人、500戸[30]。

(11.1.3) 国営農場の概要

郡長によると、全家畜頭数74,100頭、ラクダ100頭、馬5,000頭、牛9,000頭、羊60,000頭、山羊０頭を飼養している[31]。農耕地ではジャガイモ１ ha、飼料作物の燕麦[32]の栽培面積は5,000ha

である。

ジャルガラント郡では1942年に８つのバク、60,000頭以上の家畜で建設したネグデルを基盤にして、1959年に「新しい生活」ネグデルを設立した。1961年に10以上の県、40以上の郡で、チャマール羊の繁殖経営の専門化、飼料生産を強化するため、このネグデルを繁殖と飼料ステーションと位置づけた。1971年にネグデルと国営農場を合併させた。ソ連から7,000万トゥグルクの援助を受けた年、国営農場を建設した。現在はヘセック制をとり、６つのヘセックがある。

中心地には保育所、幼稚園、10年制中学校、病院、公衆浴場、暖房供給所、450KW の電力供給所、上下水道、ガソリンスタンド、60軒の固定家屋がある。1,000～1,500頭の羊を収容できる巨大な木製のハシャーが郡内に10ある。「これら全てがソ連の援助の賜である」と郡長オンドマーは誇らしげに語った。

この国営農場の畜群の構成は特徴的である。そのほとんどを羊が占め、山羊はまったくいない。羊を専門的に飼養する国営農場と言える。

その羊は在来種ではなく、羊毛の生産性をあげるための改良種、バイドラク羊である。バイドラク羊の毛は30cm、在来種より長いため、じゅうたんの材料に適している。１頭から1,8kg の羊毛がとれる。全国４つの県と14ネグデル[33]で飼われているが、ここではその50％を飼っている。すべての羊毛は原毛のままウランバートルに集荷され、加工される。

近年、バイドラク羊の飼養頭数を減らす傾向にある。

バイドラク羊は、冬期12月から４月にかけて、５ヵ月間は放牧せず、畜舎の中で飼料を与えて飼う方法がとられている。１頭のバイドラク羊に対し、90kg 飼料単位。飼料は年間2,000～3,000t 必要となり、飼料代は300～500万トゥグルクになる。

国営農場設立当時、国からの借金は800万トゥグルク、現在はまだ260万トゥグルク残っている。借金を抱えながらの独立採算は難しい。さらにバイドラク羊には飼料代がかかる。郡長オンドマーは、羊毛加工、豚肉加工、国家調達に出せない基準以下の皮革加工、タルバガンの皮革加工、乳製品加工などを行なう工場を建設し、一刻も早く借金を減らしたい、と考えていた。工場建設に関する援助をゴビ・プロジェクトに期待する、という。

(12) ガロート郡訪問（７月28日～29日）

私たちは、ジャルガラント郡から南東に向かい、最後の調査地ガロート郡を訪ねた。

(12.1) ガロート郡の概要

郡長ドルジエルツェン、ネグデル議長ドイド、モンゴル人民革命党議長バットムンフが郡の概要を説明してくれた。

(12.1.1) 自然条件

ガロート郡は県北部の山岳の森林草原地帯、郡中心地は標高2,446mに位置する。郡面積は、504,745ha、牧地面積は460,041ha、採草地8,084ha。

北東部は寒冷・亜湿潤地帯、南西部は亜寒冷・亜乾燥地帯に属する。[34]

(12.1.2) 社会条件

「県資料」によると、人口は4,258人、この内男性人口2,046人、女性人口2,212人。定住地域1,425人、遊牧地域2,833人。全戸数1,028戸、定住地域338戸、遊牧地域690戸。牧民戸数723戸、農家戸数０戸。全労働人口1,692人、牧畜業人口1,235人、農業人口０人。[35]

郡の中心地には８年制学校、ブリガードには小学校がある。中心地には、工場、公衆浴場、理髪店、ホテル、木工所、靴加工・縫製などのサービス、保養地や温泉・冷泉がある。購買部は３箇所、移動販売車は11台。医師が１人、準医師が７人、10床のベッドの病院、ブリガードにも２床の診療所がある。

(12.1.3) ネグデルの概要

ネグデル議長によると、最初のネグデルは、1952年13人のメンバーで721頭の家畜、600トゥグルクの資金で発足させた。現在の「コミュニズムの真実」というネグデルは、総生産高が700万トゥグルク、現金収入400万トゥグルク、ネグデル家畜は80,000頭以上有し、馬10,000頭、母馬2,000頭、牛10,000頭、ヤクが飼われている。発電所、トラック12台、トラクターが20台ある。賃貸契約生産は14家族、他は請負生産を行っている。

ネグデルには15のスーニー・タサックがある。１つのタサックに20から25人のサーリチンがいる。ヤクは５月１日から９月１日までの搾乳期間中330リットル搾る。バター、ヨーグルトやエーデムツェルをつくっている（5,29トゥグルク／ kg)。１日5,000リットルのミルクを加工する工場が郡の中心地にある。今後、粉乳を作るか、カゼインタンパクを作るか、思案中である。すでに、県都が近いため、集乳車で馬乳酒を集め、県都の市場に出荷している。

飼料については、700ha の飼料農場から年間2,500～3,000トンの飼料を準備している、という。

(13) 広域調査終了後

私たちは、８月１日にウランバートルに戻り、８月７，８日にモンゴル国立大学で広域調査の報告会を開いた。定点調査地域として、ボグド郡とバーツァガーン郡を選び、後の定点調査では、ボグド郡とバーツァガーン郡内のヘセックのレベルで定点調査地域を絞り込むための調査を行なうことを確認した。

1　代表小貫雅男、現在滋賀県立大学教授

2　調査日程、ルート、参加者などの概要については、今岡良子、「ゴビ・プロジェクト1990」、「モンゴル研究」13号、1990年を参照していただきたい。

3　1990年当時、ネグデル議長らから聞き取った家畜頭数などのデータと今回手にいれることができた資料のデータには誤差ほどの違いしかなかった。市場経済移行後については、同じであるはずの県と郡所有の家畜数資料に大きな違いが生じ、扱いに困っている。今回入手した資料のおかげで、1990年の聞き取り調査の資料は、非常に信頼できるものと確信することができた。

4　Монгол улсын статистикийн газар, “Монгол улсын хөдөө ай ахуй 1971－1995 онд, Улаанбаатар, 1996.（以下、この文献を『農牧業資料集１』と省略することにする）総家畜数113,300頭、ラクダ900頭、馬15,300頭、牛14,500頭、羊68,700頭、山羊14,100頭

5　夫が、ヘセック長や獣医などの公務について、自宅から離れて仕事をする場合、妻は夏の間のみ、搾乳家畜を預かり、搾乳と乳加工を行なうサーリチンをするケースが多い。

6　小貫雅男、『遊牧社会の現代』、青木書店、1985年

7　БНМАУ-ын улсын барилгын хорооны харьяа Улсын геодези зураг зүйн газар, "Баянхонгор аймгийн атлас", УБ, 1989（以下、「県地図」と略す）より、７月の平均気温は、東北部13℃、南部15～20℃、１月の平均気温は－17～20℃。年間平均降水量は、北部で260㎜、南部で100～175㎜である。

8　ジャランボグド山3,500m、ドラーンボグド山3,400m、ズーンボグド山3,700m。

9　湖面面積は140ｋ㎡、東西に30㎞、南北に９㎞。

10　「県資料」によると、人口は2,673人、この内男性人口1,365人、女性人口1,365人。定住地域には1,052人、遊牧地域には1,621人。全戸数は636戸、この内、定住地域に249戸、遊牧地域に387戸。牧民戸数319戸、農家戸数０。全労働人口986人、この内、牧畜業人口482人、農業人口０人

11　『農牧業資料集１』の1990年末統計によると、「家畜総数は77,900頭、ラクダは6,500頭、馬は7,100頭、牛は3,900頭、羊は21,800頭、山羊は38,600頭」である。

12　「県地図」によると、７月の平均気温は、北部で17～20℃、南部で20～25℃。１月の平均気温は、北部で－17℃～－20℃、南部で－15～－18℃。年間降水量は、北部で100～175㎜、30～100㎜。

13　潅木とは、①ザク、②ソハイ、③トーロイ、④ジクド、⑤ハイラース、⑥ウリアスなである。①②は最も水の少ないところで育つゴビの植物。③④は大昔、今よりも湿潤な時代に生息していたの植物で、①②よりは水の多いところに育つ。

14　熊本県の面積は7,404k㎡

15　「県地図」によると、７月の平均気温は中北部で20～25℃、南部で15～20℃。１月の平均気温は中北部で－18℃、南部で－17～20℃であるが、最高気温は35.4℃、最低気温－36℃である。年間降水量は、中北部で50～100㎜、100～175mm である。

16　塩水湖。湖水面積は252ｋ㎡であるが、湖の水量は減っている。最深地点が16m、現在２m下がってしまった。

17　年金生活者数　260人

18　「県資料」によると、「人口は3,451人、この内男性人口1,642人、女性人口1,809人、定住地域1,130人、遊牧地域2321人。全戸数771戸、定住地域131戸、遊牧地域640戸。牧民戸数592戸、農家戸数53戸

19　『農牧業資料集１』の1990年末統計によると、全家畜頭数130,300頭、ラクダ4,600頭、牛4,200頭、馬7,000頭、羊60,600頭、山羊53,900頭の家畜を飼養している。

20　この内、飲料用井戸　200

21　この内、ジャガイモ30ha、キャベツ7～8ha

22　たとえば、羊は１頭あたり５リットル/年、山羊は18リットル/年。牛は250リットル/年。

23　まずはヘセックの最優秀が選ばれ、そこから郡の最優秀、そしてさらに県の最優秀牧民が選ばれる。

24　「県地図」によると、７月の平均気温は北部で13℃、南部で18℃。１月の平均気温は－17℃～－20℃。年間降水量は北部で、260㎜、南部で175㎜。

25　平均寿命63～65才。

26　「県資料」によると、1990年の「人口は3,333人、この内男性人口1,639人、女性人口1,694人。定住地域976人、遊牧地域2,357人。全戸数721戸、定住地域259戸、遊牧地域462戸。牧民戸数462戸、農家戸数35戸。全労働人口1,581人、牧畜業人口1,511人、農業人口70人

27　『農牧業資料集１』の1990年末統計によると、「全家畜頭数154,800頭、ラクダ2,200頭、牛5,800頭、馬8,000頭、羊68,700頭、山羊70,000頭の家畜を飼養している。」

28　「県資料」の1990年末統計によると、「人口は2,326人、この内男性人口1,166人、女性人口1,160人。定住地域969人、遊牧地域1,357人。全戸数562戸、定住地域304戸、遊牧地域258戸。牧民戸数267戸、農家戸数０戸。全労働人口952人、牧畜業人口525人、農業人口０人」

29　『農牧業資料集１』の1990年末統計によると「全家畜頭数64,900頭、ラクダ100頭、牛12,700頭、馬5,100頭、羊44,300頭、山羊2,600頭の家畜を飼養している。」

30　「県資料」の1990年末統計では、「人口は3,904人、この内男性人口1,955人、女性人口1,949人。定住地域2,362人、遊牧地域1,542人。全戸数737戸、定住地域333戸、遊牧地域404戸。牧民戸数283戸、農家戸数０戸。全労働人口1,107人、牧畜業人口601人、農業人口０人」

31 『農牧業資料集１』の1990年末資料によると。全家畜頭数88,500頭、ラクダ100頭、牛11,100頭、馬5,200頭、羊70,100頭、山羊2,000頭の家畜

32 燕麦の年平均収穫量4,500～7,000 t

33 バヤンホンゴル県ではゴルバンボラク、フレーマラル、ボーツァガーン、バヤンツァガーン、バーツァガーン郡で飼われている。

34 「県地図」によると、７月の平均気温は、北東部では13℃、南西部では18℃、１月の平均気温は－17～20℃。年間降水量は、北東部では260㎜以上、南西部では175㎜。

35 『農牧業資料１』の1990年末統計によると、全家畜頭数76,600頭、ラクダ頭300、牛17,200頭、馬8,000頭、羊43,500頭、山羊7,700頭の家畜を飼養している。また、農耕地ではジャガイモ６ haのみ作付け付けている。

(2002.1.24受理)